

日本赤十字九州国際看護大学学術情報リポジトリ

タイトル	クリミア熱とナイチンゲール
著者	徳永哲
掲載誌	人道研究ジャーナル, 2 : pp 116-120.
発行年	2013.03
版	publisher
URL	http://id.nii.ac.jp/1127/00000372/

<利用について>

- ・本リポジトリに登録されているコンテンツの著作権は、執筆者、出版社(学協会)などが有します。
- ・本リポジトリに登録されているコンテンツの利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲内で行ってください。
- ・著作権に規定されている私的使用や引用などの範囲を超える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。
- ・ただし、著作権者から著作権等管理事業者(学術著作権協会、日本著作出版権管理システムなど)に権利委託されているコンテンツの利用手続については各著作権等管理事業者に確認してください。

クリミア熱とナイチンゲール Crimean Fever and Nightingale

徳永 哲¹

緒言

英国はハンプシャー (Hampshire) のイーストウェロー (East Wellow) の林の中に佇む聖マーガレット教会 (St. Margaret Church) はナイチンゲールに深い所縁の教区教会である。その教会の敷地内の墓地には彼女の墓碑が静かに立っている。

1910年8月13日、鉄道の駅ロムジー (Romsey) からナイチンゲールの遺体を乗せた馬車が、やっと通れる田舎道を抜けて、聖マーガレット教会の敷地内へと入ってきた。狭い沿道には大勢の村人が列をなして、涙のうちにナイチンゲールを迎え入れた。

ナイチンゲールが生前愛用していたショールとケープを一緒に納めた棺が墓地に静かに沈められた。墓標を兼ねた記念碑の周辺には花束が高く積み上げられた。ナイチンゲールは、ロンドンの華やかな大寺院ではなく、素朴な片田舎の教会墓地で静かな永遠の眠りについた。

逝去後100年が経った現在、ナイチンゲールの記念碑の前に立って、周辺の林を抜けていく風の音を聞いていると何故かさびしい気持ちになってきた。不思議なことにその寂しさはナイチンゲールの寂しさのようにも思えた。生涯、孤独な寂しい世界の住人であり続けたナイチンゲールが、まさにその生前の生き様にふさわしい場所を得て寂しく眠りについているようであった。

エンブリー (Embley) に隣接するイーストウェローの村は若い頃のナイチンゲールにとって縁の深い場所であった。慈善活動をしていた母ファニー (Fanny) は家を出る時必ず馬車の上から、飢饉に苦しむ貧しい農民に施しをしていた。若いナイチンゲールはそれを見ていて、貧しい人々の存在を心の奥深く焼き付けた。

イーストウェローばかりでなくダービシャー (Derbyshire) のリー・ハースト (Lea Hurst) に隣接するハロウェイ (Holloway) 村にも産業資本主義の時代に取り残された織物工場の織工たちが職を失い、貧困生活を送っていた。時代の波に飲み込まれてしまった貧しい村人たちは完全に社会から見捨てられていた。20歳代のナイチンゲールは母親の目を盗んではそうした村の貧民の生活の中に入って、世話をし、支えとなった。貧民や病院にも行けない病人を救うにはどうしたら良いのか、豊かな生活に戻る度に考え続けたが、良い考えは浮かんでこなかった。しかし、彼女の意識は社会制度の改革や政治活動といった方向へむかうことはなかった。少しでも接する時間をつくり、世話をすることで頭はいっぱいであった。外出を禁じられたときは、自分の無力さを責め、自虐的になることさえあった。こうした内向的な性格の傾向は、1854年に看護師団長としてクリミア戦争に従軍した時にも続いた。

ナイチンゲールのスクタリでの活躍は、ランプを片手に傷病兵士の看護をする貴婦人の絵画的イメージで瞬く間に英国全土に知れ渡るところとなった。犠牲的な奉仕者として、美しい貴婦人が患者を見回る美德に富む姿が *Illustrated London News* に掲載された。実際、スクタリの陸軍病院でナイチンゲールは院内を見回り、負傷や病気に苦しむ無学な兵士たちに手紙の代筆をしたり、手紙を読んであげたりしていた。兵士たちからは天使のように慕われたとされている。しかし、この絵には大嘘がひとつある。それはこの絵に描かれている院内の現状である。実際は、病院内に大勢の傷病兵が運び込まれ、彼らは床の上に直接敷かれたマットに寝かさされ、肢体の切断手術はその場で行われていた。床には血が飛び散り、汚物が散らばっていた。その惨状たる現場の状況はユールゲン・トールヴァルド著、小川道雄訳『外科医の世紀—近代医学のあけぼの』⁽¹⁾ に書かれている。

こうした惨状の中で、ナイチンゲールにとって絶対に許せないことがあった。そのひとつは、下級兵士が人間として扱われていなかったということである。負傷兵は役立たずの厄介者に過ぎず、死んで当然とされてい

¹ 日本赤十字九州国際看護大学講師

たことである。あとひとつは、負傷から死亡する兵士の数より、病死する兵士の数の方が圧倒的に多かったことである。彼女は看護師としての責任が問われていると感じた。大量の病死者に対する自責の念は、自虐的なまでに自分を追いつめることもあった。

ナイチンゲールの看護師としての原点は、イーストウェローやホロウェイの貧しい農民や織工たちの世話をし、支えとなって、安心を与えたことにあった。しかし、クリミア戦争で彼女は看護というものが想像以上に過酷なものであることを思い知らされることになったのである。周辺にいかにも彼女が聖女扱いされようとも、死んでいった、アイルランドやイングランドの貧しい農村出身の若いあどけなさの残る兵士たちの姿が彼女の心を苛んだ。彼らは給金をわずかでも残して故郷に送っていたのである。

下級兵士は最前線に立たされ、銃撃の恐怖にさらされ、負傷して入院すると麻酔もされずに外科手術をされる。そのうえ、入院費を給金から差し引かれたのである。さらにまた不潔な環境の中で、感染症で死ぬと大きな穴の中にまとめて埋められた。ナイチンゲールは、裕福な生活の中で、若い兵士の無垢な顔や哀れな姿を思い出しては役人や陸軍当局の無責任さを怒った。しかも、誰も責任取らないばかりか、責任が問われるべき将校たちの中には昇進さえする者がいたのである。1856年9月、聖マーガレット教会の礼拝でナイチンゲールはイーストウェローの貧しい村人に誓った。

国のために苦痛を耐えまた死んでいった兵士たちに対して、私たちはもはや何もすることはできません。彼らはもう、私たちの援けを必要としないのです。その魂はそれを与えたもうた神の御許にあるからです。私たち遺された者の務めは、彼らの苦しみを無駄にしないことであり、そのために今からは、この経験から学びとって、先見の明とすぐれた管理の力を発揮して、このような惨苦を少しでも減らすことです⁽²⁾。

イーストウェローの誓いはクリミア戦争以後のナイチンゲール自身の新たな生き方を表明するものであったに違いない。しかし、クリミアで思いがけなく受けた災禍はナイチンゲール自身の体の中に居座り続け、厳しい試練となって時折海岸に寄せる大波のように押し寄せてきたのである。その試練は忍耐と、社会や若い看護師に何かを伝えたいという情熱によって克服されていったのであるが、一方では、誰にも理解できない激痛と苦痛が繰り返され、孤独な闘病生活を余儀無くされ続けたのである。

20世紀も半ば過ぎてようやく、ナイチンゲールがクリミアで受けた災禍は回帰性の感染症、ブルセラ症ということが判明したが、当初、ナイチンゲールの病名がよく分からなかったことから、様々な憶測が生まれた。その中には仮病説さえもあった。もっともらしい病名を1913年につけたのは伝記作家のエドワード・クック卿 (Sir Edward Tyas Cook) であったとされている。その病名は心臓拡張症あるいは神経衰弱症であった⁽³⁾。

その後、心身症 (psychosomatic) と言われたりしたが、1918年にアリス・エヴァンズ医師 (Dr. Alice Evans) はマルタ熱と畜牛の流産熱病との間に密接な関係があることを発見し、ブルセラ・メリテンシス (Brucella Melitensis) と命名した。アリス自身その病に罹り、17年間繰り返される発症に苦しみ続けた。アリスの発見以後医師たちが病名を発表するが、総じて過労性の心身症の域を出るものではなかった。

ナイチンゲールが患ったクリミア熱に明確な病名をつけたのはデヴィット・ヤング医師 (Dr. David Young) であった。彼は、1995年にナイチンゲールの病は、当時よく知られていた地中海熱あるいはマルタ熱と同じあり、さらにブルセラ症 (Brucellosis) に含まれることを発表した。

ブルセラ症は、19世紀にクリミア熱の一つとされていた弛張熱 (Remittent Fever) と同義であり、その特徴は神経過敏症 (Nervous irritability)、発熱性興奮譫妄症 (Feverish excitability and delirium)、長期胃炎 (Prolonged gastric irritation) などの症状を引き起こす。全身の痛み、抑うつ症、食欲不振、妄想、息切れ、最もひどい症状は坐骨神経痛、激痛を伴う脊椎炎や脊髄の炎症などが一定の期間をおいて襲って来ては一定の期間苦しめると潮が引くように回復する、それが繰り返されていくのである。恒久的な障害となる場合もあるとされている。ナイチンゲールは激痛を伴う脊髄炎を発症していたようで、英国に戻ったのちにも、何度もベッドから起き上がれなくなり、激痛に襲われ、寝返りもできないことがあったということである⁽⁴⁾。

ナイチンゲールがクリミアでこの恐ろしい病にかからなければ、看護学校や聖トマス病院の若い看護師たちと親しく交わり、直接彼女の口から励ましの言葉をかけ、直接指導にあたることができたであろう。1893年シカゴ万博の看護国際会議に招かれ、米国の看護師の前で *Sick-Nursing and Health-Nursing* の講演⁽⁵⁾ をし、拍

手喝さいを受けていたかもしれない。これは勝手な想像かもしれないが、しかし、可能性として思わざるを得ない。

1. クリミア戦争と熱病

1854年11月にナイチンゲールはコンスタンチノーブル郊外のスクタリ (Scutari) に在るバラク陸軍病院 (Barrack Hospital) に赴任した。着任後3週間も経たないうちに、クリミア半島の最前線で大きな戦いがあり、負傷兵の患者の数は2千名を超えたとされている。しかし、病院内の医療設備や備品は不足していた。室内便器や洗面器や石鹸などですらほとんどない状態であった。しかも、物資を満載した輸送船が冬の嵐に巻き込まれて沈没するという災難も重なった。物資不足の英国軍はクリミアの本格的な厳しい冬を迎え、飢えや凍傷さらには疫病にかかり、壊滅状態にまで陥ってしまった。大勢の負傷兵や病人がスクタリの病院に運び込まれてきたが、そのほとんどがすでに死んでいるか、瀕死の状態であった。病院内は3千人もの患者を収容できるようになっていたが、ベッドがその数だけあったのではなく、1メートルほどの通路を挟んで床にマットを敷いているだけのものであった。夜病室に入って見まわることのできた看護師は師長のナイチンゲールただ一人に限られていた。ランプの明かりを頼りに、彼女は狭い通路を歩いて患者を見て回ったのである。院内の換気はなく、不潔で悪臭が漂っていた。

12月アイルランドの飢餓熱 (Famine fever) やコレラが猛威をふるった。アイルランド飢餓熱というのは、発疹チフス (Typhus fever)、回帰熱 (Relapsing fever)、赤痢 (Dysentery) であるが、兵士に貧しいアイルランドからの志願兵が多かったことがわかる。医療従事者 (外科医や看護師) も熱病やコレラに感染して多数死亡した。

当時のクリミアの英国軍は6種の熱病に苦しめられていた。その熱病には症状によって区別されていた。具体的には、間欠熱 (Intermittent fever)、弛張熱、単純性稽留熱 (Simple continued fever)、回帰熱、発疹チフス、腸チフス (Typhoid fever) などである。それら6種の熱病で罹患者が最も多くて、最も致命的であったのは発疹チフスと腸チフスであったとされる。その2種に次ぐ病が弛張熱であった。フランス軍やトルコ軍の兵士も罹った。クリミア熱として一般に広く知られているのは弛張熱である⁽⁶⁾。

陸軍戦時大臣のシドニー・ハーバート (Sidney Herbert) はナイチンゲールの要求や不満を受け止め、彼女を支えていた。しかし、バラクラヴァ (Balaklava) の奇襲作戦で、陸軍は大勢の兵士や軍馬を凍死や餓死させてしまった。政府の責任が問われ、シドニー・ハーバートは翌年に陸軍戦時大臣を辞任してしまった。ナイチンゲールは最強の後ろ盾を失うことになった。

新首相にパーマストン (Henry John Palmerston) がなり、陸軍大臣にパンミュア卿 (Fox Maule Panmure) がなった。新体制はハーバートのようなナイチンゲールとの結びつきはなかったが、彼女の意見を聞くまでもなく、病院管理体制や衛生面での改善に積極的に乗り出した。衛生保健局出身のサザランド医師 (Dr. John Sutherland) 他土木技師を含む3人の衛生委員をスクタリに派遣した。委員会は病院の建物と野営地の衛生状態を調査した。給水路と貯水槽が汚染され、汚濁していることが明るみになった。下痢患者のための便所は無蓋で水洗設備なし、下水溝があふれて周辺の壁に吸収され悪臭を放っていた。委員会は大量の動物の死骸やゴミを除去、下水溝を消毒、壁の害虫を石灰で駆除した。

環境衛生改善の効果は目に見えてあらわれた。病院の死亡率は急激に低下。瘴気説を信じていたナイチンゲールは環境衛生の改善がなされたことに気をよくし、看護師の仕事に精を出すことができたようになった。彼女はまた、洗濯室や読書室などを設置した⁽⁷⁾。

2. バラクラヴァ行きの災禍

1855年5月クリミア半島のバラクラヴァに新しい軍事病院ができることになった。クリミア戦争の英国軍司令長官ラグラン卿 (Lord Raglan) は手の余った看護師の派遣を望んだ。エリザベス・デーヴィス (Elizabeth Davis) という新しく派遣されてきた60歳代後半の看護師がバラクラヴァ軍事病院へ行くことを申し出た。看護師の集中管理を考えるナイチンゲールはエリザベスの申し出を理由もなく拒否した。しかし、エリザベスは

結局独断でクリミアへ渡った。

ナイチンゲールは衛生委員会と共にバラクラヴァへ視察に行くことになった。バラクラヴァは衛生状態が悪く、コレラによる死人が出ているという情報があったらしい。セシル・W・ウッダムスミスによると⁽⁸⁾、ナイチンゲールはバラクラヴァ病院が自己の指揮下にあると思っていた。しかし、バラクラヴァにはナイチンゲールと衛生委員会の活動を阻止しようとする保守的な軍の役人や医療従事者が多くいた。彼らはナイチンゲールの反対勢力として結束していた。ナイチンゲールは渾身の力を振り絞って実情視察を強行したのである。

それに対して、ヒュー・スモールはナイチンゲールのバラクラヴァ行について異なる見解⁽⁹⁾を書いている。ナイチンゲールは他の看護師、特に彼女自身が最初に選んだ38名以外の看護師に対して不信感を強く抱いており、彼女自身の目の届くところで監視、管理していなければおさまらない性格の持ち主であった。彼女の独善的な専制主義的管理に対して、クリミアの軍医長ジョン・ホール (Dr. Sir John Hall) をはじめとする医療従事者は特に反感を抱いていたと論じている。

強引ともいえるナイチンゲールのバラクラヴァ視察は、彼女自身に思わぬ災禍をもたらした。信頼と理解に富む寛大な気持ちで、無理な視察などしなければ、災禍は免れていたかもしれない。彼女は、バラクラヴァで突然激しい疲労感と憔悴感を覚えて、昏睡状態に陥ってしまったのである。サザランド医師の診断でクリミア熱 (Crimean Fever) にかかっていることが発覚、2週間生死の境を彷徨してしまった。病のことはヴィクトリア女王の耳に伝わった。ナイチンゲールは女王の特使ラグラン卿の訪問を受けた。主治医サザランド医師の付き添いで、彼女は英国へ直接搬送される予定であった⁽¹⁰⁾。ところが、ナイチンゲールはスクタリで下船を要求、スクタリに留まってしまった。病気は2、3週間後に回復したが、その時、英国に戻って、完治するまで英国の病院で治療してもらい、静養しておれば、クリミア熱は大きな災いとはならなかったかもしれない。

3. 帰国後の再起と病克服

1855年10月下旬ナイチンゲールは再び病に襲われ、激しい坐骨神経痛 (sciatica) で入院。旧友のブレースブリッジ夫人 (Selina Bracebridge) に手紙で「クリミア熱、赤痢、リウマチなどこの風土がもたらす病のすべてを経験しましたから、もうこの体はこの風土に完全に順化され、兵士と共にこの戦いに 耐え抜く用意ができた」と確信しています⁽¹¹⁾と書いた。

1856年8月 帰国後ナイチンゲールはテムズ川の南側の貧困地区の真中に在るバーモンジー修道院 (Bermonsey Coonvert of Mercy) を訪れた。その修道院は1838年に創設されたカトリックの修道院で、修道院長メアリー・ムーア (Revd Mother Mary Moore Clare) はスクタリでナイチンゲールの片腕となって忠実に働いていた。彼女と配下の修道女たちはナイチンゲールが施行した医療統計の資料を英国へ一足先に持ち帰っていた。ナイチンゲールはその資料を受け取って、列車でダービシャーに向かった。最寄りの鉄道の駅を降りるとリーハーストまで歩いたということである。

クリミア戦争で地獄を見たナイチンゲールは、その記憶によって、流された兵士の血が生き残った人々の幸せのために彼女に立ち上がるように求めていると思いつけた。6か月間に73%が疾病で死んだという統計上の事実が、英陸軍の健康管理上の制度の欠陥がもたらしたものであることを実証していると確信した。今のままではいけない、という使命感を奮い立たせるが、しかし、動悸、呼吸困難、失神、虚弱、消化不良に悩まされた。

1857年8月過労が原因と思われる虚脱発作を起こし、温泉地に保養に出かける。9月高熱を出し、自己が傷病者であることを認める。1857年～1861年は病状が悪化し、死が切迫していることを意識する。1861年12月、新たな症状が彼女を襲い、脊髄に激しい痛みを感じ、半年寝たきりになる。1866年前半年、再び脊髄の痛みは激しさを増し、48時間姿勢を変えることが出来なかった。1867年には一日に一人だけ面会できるようになった。

以後10年間ナイチンゲールは発症を繰り返しながら、ほとんどがサウスストリートの一室の寝床の上での仕事になったのであろうが、この間に彼女の成し遂げた仕事はスケールが大きく、しかも歴史に残る重大なものであった。1859年、『病院覚え書』(Notes on Hospitals) と『看護覚え書』(Notes on Nursing) を出版、1859年『思

索への示唆』(*Suggestions for Thought*) を出版、1860年、「ナイチンゲール看護訓練学校」、「陸軍軍医学校」を開設、1861年「ナイチンゲール助産訓練学校」をキングスカレッジ病院 (King's College Hospital) に開校、1872年から1900年までナイチンゲール看護養成学校の学生たちと聖トマス病院で働く卒業生たちに書簡を送り続けた。その数は14通に及び、その7編が1914年に *Florence Nightingale to Her Nurses* として出版された。彼女は看護学校や助産学校で教壇に立つことはなかった。また、学生や若い看護師たちを集め経験談を語って聞かせることもなかった。ブルセラ症がそうした機会をすべて奪い去ってしまったとするならば、残念である。

註

- (1) ユールゲン・トールヴァルド著、小川道雄訳『外科医の世紀—近代医学のあけぼの』へるす出版。p.221-235
- (2) Cecil W. Smith; *Florence Nightingale 1820-1910*, Constable, 1950. p.259
- (3) Barbara M. Dossey, *Florence Nightingale: Her Crimean Fever and Chronic Illness. (Florence Nightingale Today, Healing Leadership Global Action. American Nurses Association, 2005. p.90-95)*
Brucellosis and Psychology, Nightingale's "depression" .
(www.florence-nightingale-avenging-angel.co.uk/D)
- (4) Barbara M. Dossey, *Florence Nightingale: Her Crimean Fever and Chronic Illness. Florence Nightingale Today, Healing Leadership Global Action. American Nurses Association, 2005. p.90-95)*
Brucellosis and Psychology, Nightingale's "depression"
(www.florence-nightingale-avenging-angel.co.uk/D)
- (5) Barbara M. Dossey, *Florence Nightingale: Her Crimean Fever and Chronic Illness. Florence Nightingale Today, Healing Leadership Global Action. American Nurses Association, 2005. p.287-297)*
- (6) Barbara M. Dossey, *Florence Nightingale: Her Crimean Fever and Chronic Illness. Florence Nightingale Today, Healing Leadership Global Action. American Nurses Association, 2005. p.90-95)*
Brucellosis and Psychology, Nightingale's "depression" . (www.florence-nightingale-avenging-angel.co.uk/D)
- (7) セシル・ウッダム・スミス『フローレンス・ナイチンゲールの生涯』現代社 p.235-284
ヒュー・スモール著、田中京子訳『ナイチンゲール神話と真実』みすず書房 p.31-78
- (8) セシル・ウッダム・スミス著、武山満智子・小南吉彦訳『フローレンス・ナイチンゲールの生涯』現代社 p.235-284
- (9) ヒュー・スモール著、田中京子訳『ナイチンゲール神話と真実』みすず書房 p.31-78
- (10) セシル・ウッダム・スミス著、武山満智子・小南吉彦訳『フローレンス・ナイチンゲールの生涯』現代社 p.285-320
- (11) Cecil W. Smith, *The life of Florence Nightingale*, Constable. p.231

*参考文献

Hugh Small, *The Florence Nightingale*, Amberley, 2010.

Florence Nightingale: *Her Crimean Fever and Chronic Illness*, in *Florence Nightingale Today Healing Leadership Global Action*. (pp.90-94),